

二〇一一年三月三日(石峰寺・伏見稻荷参加者一四名)

轉れる一息入るる参礎に	つくし
談合のごとくに羅漢日脚伸ぶ	"
藪椿ま青な空に朱を散らし	"
楼門の威風堂々春日和	小袖
落葉道賽の河原に行きどまり	"
春陰の羅漢のひとつ合掌す	"
阿羅漢の忿怒ゆるびし春陽射し	うつぎ
現し世の春愁ふかに羅漢どち	"
羅漢訪ふ小径三茱萸明りして	"
木の芽風顔ふくよかに羅漢仏	あさこ
一山を羅漢で埋めし春の風	"
春風や蒼天に反る朱の庇	"
春光をあまねく受くる十字墓	ぼんこ
うそ寒し鳥居のそばの占い師	"
地蔵守る婆の説法暖かし	ひかり
石塔に積む石あまたうそ寒し	"
目鼻なき五百羅漢に春日燦	百合
冴え返る賽の河原の地蔵尊	"

春寒し墓域を外れてクルス墓	菜々
羅漢みな肩寄せあひて彼岸寒	"
春日洩る千本鳥居くぐり抜け	きづな
石一つ積みて春愁うべなへり	"
盤石の寝釈迦に春の落葉かな	満天
春愁や重軽石の重きこと	"
朱の揺れて千本鳥居陽炎へり	宏虎
春光や伏目がちなる羅漢たち	せいじ
温かや震災復興祈る絵馬	はく子
春落葉積みしを褥涅槃仏	"
唐門へ参礎百段梅香る	"

吟行句会みの選

二〇一一年三月三日(石峰寺・伏見稻荷参加者一四名)